

## 第7章

# 島嶼交易と海洋国家

—琉球列島とフィジー・ラウ諸島を事例として—

### はじめに

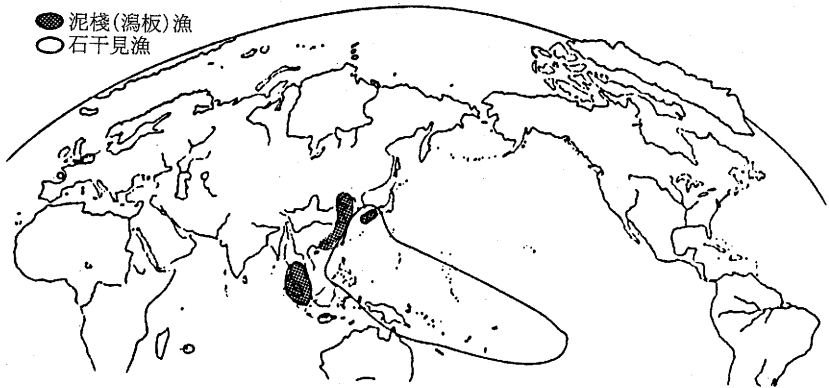
本章は琉球列島とフィジー・ラウ諸島において海洋島嶼国家がどのように形成されてきたのかを交易活動を中心にして論じた。琉球王国は1429年に全島が統一される以前から、アジア諸国と交易を行い、外交関係を結ぶことで海洋島嶼国家として財政的基盤を満たすと同時に、独自の国家像を形成した。一方、ラウ諸島でもラケンバ島を中心とした纏まりがあり、そこはフィジー語で国家を意味するマタニトゥと呼ばれており、独自の交易システムと、トンガやフィジーの他のマタニトゥとの間に各種の儀礼関係をもっていた。東アジア文化圏に属する琉球王国と、オセアニア文化圏に属するラウ諸島では当然のことながら、交易内容や国家形成の過程などに相違点がいくつかみられるが、同時に共通点も以下のように整理できる。

- (1) 琉球は日本全国一般からみると歴史的、文化的違いがあるが、ラウ諸島とフィジー全体との関係もそうであり、大島嶼国家に対する小島嶼国家としての類似性をもつ。
- (2) 琉球は東アジア諸国からほぼ等距離の位置にあるが、ラウ諸島もトンガとの間の距離とフィジー・ビチレブ島との間の距離が同じく約300キロである。大国との間に一定の間隔を保つことで、海を通じて様々な地

域の政治経済的な影響をうけ、その文化を受容し、独自の勢力圏を形成することに成功したが、これは海洋島嶼性の表れであるといえる。

- (3) ラウ諸島の最高首長トゥイ・ナヤウやマアフのように異人王の伝統がラウ諸島にはある。琉球でも舜天王が源為朝の子、英祖王が天子の子、察度王が天女の子という伝説があり、また、第一尚氏の始祖が伊是名島出身、第二尚氏の始祖が伊平屋島出身といわれているように異人王の伝統がある。海の彼方から来島する強力な異人を受け入れ、島嶼の政治秩序を確立する枠組みが島嶼に備わっていたといえよう。
- (4) 信仰、言葉、漁法における類似性もある。琉球では海上の彼方・ニライカナイに理想郷をもとめる信仰があるが、同様なものがラウ諸島でもプロツとして信じられている。琉球の西表島においてヤマイモの呼称には「ウム」という語尾があるが、フィジーでもそれは「ウビ」と呼ばれている。そして石干見漁の分布が図1のように両地域を覆っている。石干見漁とは珊瑚礁の岸边に円形または三角形に石垣を築き、潮の干満を利用した漁法であり、環境上の類似性が共通の漁法を生み出した。

図1 石干見漁と泥棧（潟板）漁の分布



(出典) 藪内編 [1978], p. 683.

このような相似性を基礎にして海洋島嶼国家形成のありかたを考えてゆきたい。本章の構成は以下ようになる。第1節「琉球列島における交易と海洋国家の形成」ではアジア間交易、王国内交易と、中国型・日本型・琉球型華夷秩序観と、そしてニライカナイ信仰との関係性を追求することにより海洋島嶼国家像の形成内容を明らかにしたい。第2節「フィジー・ラウ諸島における交易・信仰・マタニトゥ」では島嶼間の環境的違いに基づいたラウ内交易、トンガ間交易がどのようにマタニトゥを作り上げたのかを論じる。「結びにかえて」では琉球王国とラウ諸島との相違性を相似性と関連させる形で述べることで、アジアとオセアニアにおける海洋島嶼国家の性格を概括してみたい。

## 第1節 琉球列島における交易と海洋国家の形成

### 1. 交易と琉球王国

1429年に琉球王国が統一される以前においても琉球をとりまく海は交易の路であり、各種の物産が移動していた。例えば、琉球弧でとれたゴホウラやイモガイの腕輪が九州から北海道まで分布しており、また琉球弧の貝は銅釧の祖型になり、古墳時代には車輪石・石釧・楯形石の祖型になった(東京国立博物館 [1992], p. 122)。10世紀前後には長崎の西彼杵半島で作られた石鍋が、そして11世紀には徳之島で製作された亀焼が琉球弧にいきわたり、13世紀になると多量の中国製陶磁器が持ち込まれた(安里 [1991], pp. 84-88)。

1372年に中山王察度が明に朝貢して1874年に最後の進貢が行われるまで琉球は中国と朝貢冊封関係を結んだが、その中国型華夷秩序という外交関係を通じて様々な物産が取引された。また1609年に薩摩藩に侵略された琉球は日本との間に日本型華夷秩序という外交関係を結び、物産の行き来を促した。

琉球は中国型華夷秩序のなかに位置することにより日本・朝鮮・東南アジ

アの諸国とも交易関係を形成して自国の不足を補った。例えば、中国に対する貢品として、馬・刀・金銀酒海(酒を盛る器)・金銀粉厘・瑪瑙・象牙・螺殻・海巴・擢子扇・泥金扇・生紅銅・錫・生熟夏布・牛皮・降香・木香・丁香・壇香・蘇木・烏木・胡椒・硫黄・磨刀石などがあったが、そのうち琉球産は馬・螺殻・海巴・生熟夏布・牛皮・硫黄だけであった(宮城・高宮編 [1983], p. 19)。

また琉球が日本型華夷秩序に属することで銀・銅・倭物などを入手し、それらを中国に再輸出することによって中国との交易関係の継続が可能になった。そして鉄器などの日常品も日本からもたらされ、島内の不足を補った。しかし中国型華夷秩序と違って、日本型華夷秩序は王府への内政干渉や米・黒糖・鬱金などの薩摩への納入という義務を琉球に課すものであった。

資源の少ない琉球王国が1429年から1879年まで存続できた理由の一つとして、アジア諸国と独自の外交関係を結び、各地の物産を琉球に集めたことを指摘できる。このような認識は18世紀初頭に王府により編纂された『中山世譜』に明らかである。

「我國は土が痩せ産物が少ないので國の用が足りない。故に朝鮮・日本・暹羅・爪哇と交易を行い、國の用を充たした。しかし萬曆年間に薩摩の侵入を受け、それ以来、朝鮮・日本・暹羅・爪哇との交易が跡絶えた。本國は孤立し、國の用が再び不足した。幸いに日本の度佳喇商民(薩摩商人)が貿易のために来島したことにより、國の用が備わり、王國は再び安定した状態になった。」(伊波・東恩納・横山編 [1941a], p. 111)<sup>(1)</sup>

交易により国用が備わり、それが跡絶えると「本國孤立。國用復缺」の状態になったと述べ、交易の重要性を記している。また18世紀初頭の為政者蔡温も交易が王国維持の要であると述べている(崎浜編 [1984], pp. 76-78)。

さらに琉球王府の構造自体に海洋国家として以下のような特徴がみられる。朝鮮や東南アジアとの交易が行われていた近世以前の琉球王国の家臣団はヒキと呼ばれる12の集団にまとめられていたが、各ヒキはそれぞれ船頭(勢頭)という大将に率いられており、またヒキにつけられた名前と貿易船の名前は

同じであった。そして近世琉球においても旅役（対中国，対日本，対先島）の回数によって家臣の昇進が決定されていた（真栄平 [1984]，pp. 447-476）。それは王国が島嶼からなり封地が十分になかったという島嶼国家の特性を示すものである。中国への使節に対して渡唐衆御茶飯という儀礼が行われ，王自ら臨席した（伊波・東恩納・横山編 [1941b]，p. 36）。

国家間の交易のほかに，琉球王国内部の交易により島嶼民は島で欠乏しているものを融通しあった。琉球の島嶼の多くは隆起石灰岩によって成り立っているが，石灰岩の表土は重粘土であり，それは乾くとひび割れを生じる。これを防ぐために琉球では牛の蹄でひび割れを埋めるという蹄耕が行われていた（高谷 [1984]，pp. 19-20）。島嶼の貧しさについて琉球出身の歴史学者，伊波普猷は次のように述べている。「琉球に幾度かおこった革命と擾乱とは，食糧問題が主因をなしてゐるといって差支なかるう」（伊波 [1974]，p. 75）。

1477年に琉球に漂流した朝鮮人の報告が記載されている『成宗大王実録』によれば，次のような島嶼間交易が行われていた。つまり波照間島では「水田なく稲米は所之島〔西表島〕に貿易す」（李編訳 [1972]，p. 458），新城島や黒島も「稲米は所之島に貿易す」（同上，p. 459），多良間島では「材木なく或は所之島より取り，或は伊羅夫島〔伊良部島〕より取る」（同上，p. 460）<sup>(2)</sup>，そして宮古島では「炊飯には鉄の鼎を用う。足なく釜に似たり。乃ち琉球國に貿易せるものなり」（同上，p. 461）。島嶼間交易の背景には稲や木材の多い，面積の広い島である高島と，それらが不足しがちな低島という島嶼の環境条件の違いがある。八重山諸島では前者は田国（タングン）島と呼ばれ，西表島・石垣島・小浜島・与那国島などがこれに属し，後者は野国（ヌングン）島と呼ばれ，竹富島・黒島・新城島・鳩間島・波照間島などが属した（安溪 [1988]，p. 5）。稲や木材だけでなく波照間島の下田原貝塚から高島でしか分布しないシレナジミが発見されたように，様々な物産が島嶼間を行き来していた（安溪 [1992]，p. 596）。交易によって島嶼民はその生存を保ってきたのだ。

同地域では戦前，活発に稲を貨幣とした物産の交換が行なわれていた。例えば新城島の稲束と黒島の泡盛・味噌・醤油，そして西表島西部の稲と黒島

のソテツの灰、西表島西部の白米・粳と鳩間島のアオサ・カツオの頭・醤油がそれぞれ交換されていた。このうち黒島のソテツの灰1俵は西表島西部の稲30束と同価値をもったが、30束はマルシと呼ばれ、物産交換の単位となった(安溪 [1988], pp. 14-18)。島嶼間の中で貴重財である稲が貨幣の役割を果たし、物産交換を促した。

また水田がない竹富島・新城島・鳩間島から西表島に舟で通って稲作をして稲を自らの島に運んだ。松や杉で作られた舟は稲だけでなく建築用材・薪なども積んだが、鳩間節の歌詞によれば粟・甘藷も西表でつくり舟で運んだという(浮田 [1974], pp. 511-520)。

島嶼民にとり交易が人々の生命維持のために非常に重要であったことを示すものとして次の八重山の諺がある。「島持ちと舟乗ゆぬもぬでん 勢頭舟子親子揃ねばならぬ(島の統治と舟の操縦は同様であり、船頭・舟子・親子が一心同体にならねばならない)」(喜舎場 [1979], p. 116), 「うるじん早魁や大渡渡りしいさにし早魁や無渡渡(4, 5月の陽春の頃は農作物の時期で、その時に早魁になると食糧不足のため遠島から補給しなければならないが、旧10月北風が吹く頃の早魁の時には農作物の収穫が終わっているので遠島に渡る必要はない)」(同上, p. 132)。

以上みてきたように琉球王国は中国型華夷秩序や日本型華夷秩序という東アジアの外交関係の中に参入することで、交易国家として各種の物産を手に入れることができ、また琉球王国内部においても島嶼の環境的違いに基づいた交易が王国時代から戦前にかけて行われていた。次に経済活動としての交易の背景にある中国型華夷秩序・日本型華夷秩序そして琉球型華夷秩序を検討することで、海洋国家琉球が自らの国家像を儀礼やコスモロジーを通じてどのように形成していったのかを明らかにしたい。

## 2. 海洋国家琉球の国家像形成

琉球は中国と、孫と祖父という血縁関係と、二品の官僚という君臣関係によって結ばれていた。中国においては官制が九の品（位階）に分けられていたが、その位階が琉球にも当てはめられており、中国側では同じく二品である福建の布政使が琉球国王と同等の立場にあった。琉球からは進貢使を送り中国皇帝を慶賀したが、中国からは冊封使が派遣され琉球王の継承を正式に認めた。次の王府編纂国史『球陽』にみられるように儀礼的外交関係の背景には皇帝を琉球のコスモロジーと儒教原理の中心に位置付けようとする琉球人の心性があった。

「洪武年間、明の太祖、閩人を我が王に賜ひ、教を国中に敷き、礼を制し楽を作る。此の時、始めて斯の礼を制し、天、穀粟に雨ふらすの佳瑞の似くして、以て五穀の豊登を賀するならんや。」（球陽研究会編 [1974], p. 110）

五穀豊穰の理由は中国儒教原理の琉球における教化の結果であると認識していることがわかる。

同じことは日本型華夷秩序についてもいえる。江戸幕府や薩摩藩に琉球は慶賀使や謝恩使を定期的に派遣し、儀礼的行事を行い芸能を披露した。年貢納入という薩摩藩に対する物的な琉球の責務については先に述べたが、また豊穰や天災への救済という「王」の義務を薩摩藩は以下のように目に見える形で示した。

「旧年の夏秋、颱風七次あり。十月に至りて、颱風最も暴し、国、大いに饑饉を致す。王、即ち倉廩を発し、周く人民を救ふ。然れども、春に入り、饑甚だしく、民已に餓殍す。遂に其の事、薩州に聞ゆ。是れに由りて、薩州太守吉貴公、白銀二万両を寄賜して、以て本国の餓莩を賑濟せしむ。」（同上, p. 709）

中国型華夷秩序や日本型華夷秩序に属した琉球はアジアの中で外交・儀礼・

コスモロジーを通じて自らの国家像を形成してゆくが、琉球王国内部にもまた華夷秩序があり、儀礼・コスモロジーを再生産していった。史伝によれば1264年に久米島・慶良間島・伊平屋島、1266年に奄美大島がそれぞれ英祖王に入貢し、1390年に宮古島・石垣島が察度王に朝貢したとされている。また1466年には尚徳王が喜界島に侵攻し、1500年に石垣島で起こったアカハチ・ホンガワラの乱や、1522年に与那国島で生じた鬼虎の乱を平定して支配権を確立した。奄美大島に対しては1537年に尚清王、1571年には尚元王がそれぞれ軍隊を送り王国の一部とした。

琉球型華夷秩序もまた儒教原理に裏打ちされていたことが『中山世譜』の記述によってわかる。例えば、

「南夷である宮古・八重山から臣が来島した。」(伊波・東恩納・横山編 [1941a], p. 25)<sup>(3)</sup>

「南夷」という言葉は沖縄島の王府を華とする認識から出てきたものである。また奄美大島が琉球に入貢する際の記述をみても、

「海に隔てられ、地も異なり王国の政令が及ばないのになぜ来島したのかと国王が尋ねた。それに応えて、我が海島の近くでは烈風猛雨の憂えがなく五穀豊穰ですが、これは必ずや王国の善政を天地が感じられたのであり、それが来島の理由ですと述べた。」(同上, p. 35)<sup>(4)</sup>

五穀豊穰と儒教原理との関連性を中国と琉球との間に考えていた王府は、その関連性を自らと属島との間にも認識の枠組みとして用いていたのである。そして宮古島・石垣島が入貢し、使者が沖縄島に行ったことを次のように認識していた。

「琉球において事大の礼が行なわれていたのを見た。属島が臣として朝貢していた。このことをもって琉球の力は増したと始めていうことができるだろう。」(同上, p. 43)<sup>(5)</sup>

王府も先島の属島化により国家としての権勢が強化したと考えていたことがわかる。

1771年の明和の大津波、1772年の疫病の流行、1785年の飢饉など、近世琉



球は何度かの天災に遭遇した。その都度、王府は救済食糧を支給し、米銭を寄付した者を報奨し、平和回復を祈禱する主体になったが、次の文はそのことを明らかにしている。

「此の年六月以来旱魃威を施し、久しきを経るも已まず。是を以て王、旨を伝へ、八月二十五日より、二十七日に至るまで、王城御火鉢前並びに各嶽に於て禱告し、訖りて、親方、官僚共に三十七人を率同して拝し、且前の御庭に在りて雨を禱る。」(球陽研究会編 [1974], p. 489)

ここにはコスモロジーの中心に位置する「王」の存在がある。

明和の大津波の後に王府から与那覇親雲上朝起が派遣され、石垣島復興のための様々な施策が行われたが、その与那覇を讃えて与那覇節という次の歌がつくられた。

「与那覇主ぬ御蔭に主ぬ前ぬみぶぎんに 昔世ばたぼうられ神ぬ世ばたぼうられ (略) 五日まあり十日越ぬ夜雨ばたぼうられ」

歌の意味は次のとおりである。与那覇在番のお陰で、豊年で平和な年を迎えることができました。5日ごとに風を吹かせ、10日ごとに夜雨を降らせて頂き有り難いことです(牧野 [1968], p. 313)。首里から送られた役人を自然現象を司る神として見なした島嶼民の心性が表れている。また蔵元という石垣島の庁舎では冬至・1月15日に首里王府に向かい遙拝の儀式を執り行った。このような恩恵の反面として王府は宮古島・石垣島などの先島に重い人头税を課し、王国の属島とした。さらに王府は1689年に各氏族に対して1字の姓をつけるように命じたが、先島においてはそれが1729年に2字の姓という形で行われ、沖縄島の氏族と「識別」ができるようになっていた。

琉球王国の境界は言語によっても確定できる。琉球語の範囲は奄美大島から与那国島までであるが、日本本土の言葉との違いが生じた理由は琉球が王国として政治経済的・文化的纏まりをもっていたからであると言われている(中本 [1983], p. 9)。16世紀前後にかけて行われた尚真王による王国の中央集権化は首里方言の周辺地域への普及をもたらしたが、その定着度の大きい順に並べると次のようになる。(1)沖縄島中南部、久米島、慶良間諸島、(2)沖

縄島北部、伊江島、(3)沖永良部島、与論島、(4)喜界島、徳之島、奄美大島、(5)石垣島、(6)与那国島、(7)多良間島、水納島、(8)宮古島(同上、pp. 73-74)。中心の言葉に対する周辺の言葉の位置関係は琉球内の政治的な華夷秩序とほぼ重なっていたといえよう。

以上のような王国の秩序は国王の権能だけでなく、琉球独自の聞得大君という女性最高巫女の存在があつてはじめて可能になった。聞得大君は沖縄島南部にある斎場御嶽でオアラオリと呼ばれた儀礼を行い、ニライカナイという海上他界からオナリセジという靈力を身に付けて大君の役についた。そして大君はオボツカグラ(天上界)から支配者としての靈力を国王に与え、様々な祭りにおいて国王を助け、琉球国の安泰を祈った。

琉球の宇宙観の中心にくるのが先に述べたニライカナイである。人は死ぬとそこに行くが、またニライは火・稲・生命・靈力をもたらす所であると同時に、天災・人災を発生させる源であるとも考えられている。王府編纂の『琉球国由来記』には以下のような記載がある。

「當國、田・陸田、昔阿摩美久、ギライカナイヨリ、稻種子持來、知念大川・玉城親田・高マシノマシカマノ田ニ、稻植始也」(伊波・東恩納・横山編 [1941b], p. 82)

阿摩美久という琉球の神がニライカナイより稲の種子を島にもたらし、知念・玉城の田に植えたのが稲作の始めであると述べている。常世の国について折口信夫は次のように記している。

「氣候がよくて、物資の豊かな、住みよい國を求めへて移らうと言ふ心ばかりが、彼らの生活を善くして行く力の泉であつた。彼らの歩みは、富みの豫期に牽かれて、東へへと進んで行つた。彼らの行くてには、いつ迄もへ未知之國が横つて居た。其空想の國を、祖たちの語では常世と云うて居た。」(折口 [1955], p. 7)

折口は常世の國を琉球においてはニライカナイであるとしているが、その物資が豊かなニライを求めながら人々は島々を移動したと推測している。富の源泉を求める島嶼民の心情について柳田国男も以下のように言っている。

「稲という穀物の根原がニルヤにあり、これを繁茂せしめて人間の力と幸福とを、豊かにすることが本来の機能であったかも知れず、いわば南島の根の国が、単なる亡者の隠れ行く処であるに止まらず、絶えずこれから流れ出て、現世を楽しく明るくするものの、ここが主要なる源頭であることを、かつて我々は南北共同に、信じていた時代があったのではないか。」(柳田 [1989], pp. 140-141)

資源の少ない島嶼で厳しい生活を送る人々に生きる希望を与えるものがニライカナイであり、また物的な豊かさを手に入れるために島嶼民は危険な航海を敢えて行ったのである。

ここでニライカナイ信仰と琉球王国の交易活動とを関連させて考えてみたい。海の彼方にある富に対する憧れと、その富を島に引き寄せる手段として交易活動は機能していたのではないか。その背景には生活空間が狭く、資源が少なく、海によって閉ざされているという島嶼の厳しい環境があった。害虫を送り出す所、天災・人災の時は何らかの形で救済してくれる所、島に不足するものを与えてくれる所、琉球王国という資源の少ない小国家を東アジアの中で国家として存立させてくれる所という島嶼民の願望がニライカナイ信仰に結晶したのではないか。信仰とは信仰世界の中で完結するのではなく、実際的な物産の動きや社会状況との対応関係を通じて形成され、維持されてゆくのであろう。また強烈なニライカナイ信仰があったので物産の運び手であった島嶼民も生命の危険をおかしてまで航海をすることができたのではなかろうか。

海洋島嶼国家琉球の国家像形成の鍵として交易と儀礼・信仰をみてきたが、次の節ではフィジーのラウ諸島において交易と信仰がどのようにマタニトゥ(国家)を作り上げてきたのかを考察してみたい。

## 第2節 フィジー・ラウ諸島における交易・信仰・マタニトゥ

### 1. 交易とラウ諸島

ラウ諸島はフィジー・ビチレブ島から東南の方向にある約50の島々からなる。ラウ諸島はフィジー全体と比べて、政治組織、言葉、工芸品、島嶼民の肉体的特徴、慣習などにおいて明確な違いをみせている (Young [1993], p. 162)。

このラウ諸島でも琉球と同じく、島嶼は自らの不足を補うために他の島嶼と交易をした。1930年代に調査したローラ・トンプソンによれば、東部のラウ諸島の島々の間には次のような環境的違いがあった。(1)火山岩の島としてモゼ島、コモ島、ディディア島があり、(2)火山岩と石灰岩で形成されている島はラケンバ島、カンバラ島、オネアタ島、オノ島であり、(3)石灰岩の島はワンガバ島、フランガ島、オンゲア島である。火山岩の島ではヤム、タロ、マニオク、パンの木、バナナそして他の熱帯果樹が豊富に取れるが、建築・工芸用の木材が不足している。一方、石灰岩の島ではヤムやタロが不足がちである反面、ラグーンに生息する魚や建築・工芸用の木材が豊かにある (Thompson [1940a], pp. 10-12)。これらの環境上の違いを反映して、例えば、火山岩島であるモゼ島からマニオク、ヤム、バナナ、カバなどが石灰岩島であるフランガ島、オンゲア島、カンバラ島に送り出されていた (同上, p. 211)。

物産の品質によっても産地が形成されていた。桑はすべての島で栽培することができたが、タパ(樹皮布)にできる質のよいものはナムカ島、モゼ島にしかなく、これらの島々がタパ生産の中心地になった。その生産様式はトンガ式であり、近隣の島々やラウ諸島の中心島であるラケンバ島に運ばれていた (同上, pp. 193-194)。島嶼間において物産の特化が行われることで、それぞれの物産をつくるための技術が向上し、島嶼内の経済活動も活発になった。

石灰岩島から送り出されたカヌー、木製工芸品、タバ、マットなどの品質がトンガやフィジー全体で評判となり (Thompson [1938], p. 188), 後で論じるようにトンガがラウ諸島と交易する大きな要因になった。資源の配分上において偏差のある島嶼において人々が生存していく際に、それぞれの島々を結びつける交易活動は不可欠であり、交易を通じて島内生産を発展させていった。

ラケンバ島にいたレブカ人が専門の交易者として知られていたが、最も活発に交易活動に従事していたのはフランガ島やオンゲア島という石灰岩島の人々であり、交易によって火山岩島から食糧をえて生存することができた。1930年代当時の交易路は以下になる。(1)フランガ島、オンゲア島→モゼ島、ナムカ島、(2)フランガ島→ナムカ島、モゼ島、(3)カンバラ島→モゼ島、ワンガバ島、(4)カンバラ島→ラケンバ島、ワンガバ島、コモ島、(5)モゼ島→ラケンバ島、オネアタ島となり、ラウ諸島間の主要な交易路は石灰岩島から火山岩島に向かうものであった (Thompson [1940a], p. 212)。

石灰岩島がラウ諸島における交易活動を担った主体であるといえるが、その背景には石灰岩島における日常的な食糧不足という問題があった。その原因は菜園に利用できる土地が少なく、またその土地は多孔性で保水力がないうえに新鮮な水も十分でないことにあるが、さらにしばしば来島する台風により食糧不足は一層、深刻になる (Thompson [1940b], p. 82)。生存条件が厳しい石灰岩島では人口もまた不足気味であり、例えばフランガ島に他島から結婚のために女性が来島することはほとんどなかったが、ナムカ島のような火山岩島で食糧が豊かな島には多くの女性が来島したという (同上, p. 138)。このことから交易が石灰岩島の人々にとり生存手段として欠かせないものであったことがわかる。

このような交易は現代でも行われており、1970年代初期にラウ諸島を調査したアルノは「ラウ諸島には様々な特化した経済単位があり、それぞれの島に住む交易集団が多くの島々に交易相手をもっており、ほぼ平等な形で交易を営んでいる」(Arno [1976], p. 76) と述べており、モゼ島には毎日、他島か

らの来航があり物産が取引されていた。

コロ海の西側にあるモアラ島は1854年までムバウに朝貢していたが、その年以降トンガの勢力圏内にはいり、同じくトンガの勢力圏にあったラウ諸島との関係が深くなった (Sahlins [1962], pp. 15-16)。モアラ島に多くの女性配偶者を送っていたのはラケンバ島であったが、その女性たちがマット作りの技術を伝えたので、それがモアラ島の特産となった (同上, pp. 416, 422)。ラウ諸島からは木製工芸品、カヌーが、そしてモアラ島からはヤムなどの食糧がそれぞれ交換された。またモアラ島の近隣にあるトトヤ島やマツク島とも交易関係にあり、火山岩島であるモアラ島からは食糧品がもたらされ、木製工芸品、カヌーなどがトトヤ島、マツク島から送られた (同上, pp. 420-421)。大地域、小地域において島嶼間の生態的違いに基づいた交易の網の目が張り巡らされていたのであり、火山岩島は食糧を、石灰岩島は木製工芸品、カヌーなどを特産品とするという交易形態はミクロネシアのヤップ島とカロリン諸島との間で行われていたサワイ交易と類似の性格をもっている。

次に交易手段となった船舶について論じてみたい。英国議会資料によれば、1897年には102隻の蒸気船と27隻の帆掛け船がフィジー内を航行していたが、その船の大半は10トン未満の小さな規模のものであった。1887年において西欧人が所有していた船は49隻であったのに対し、地元民所有の船は50隻であったが、1890年になると前者が137隻になり、後者が247隻と激増した (*British Parliamentary Papers, Colonies General*, Vol. 36, C. 9046-12: Annual Report for 1897, p.244)。この統計数字にはカヌーの数は含まれておらず、カヌー数を考慮すると地元民所有の船の数はさらに増えよう。このことから地域間交易の主体は島嶼民であり、1874年に英国の植民地になったからといって西欧人により交易活動が支配されていたのではなかったことがわかる (表1参照)。

ちなみに1930年代においてカンバラ島、オンゲア島、モゼ島、ナムカ島で航行していたカヌーの数は32隻であったが、1990年にはそれが68隻に増えた (Gillett et al. [1993], p. 75)。近代的船舶と共存する形でカヌーが運行でき

表1 船舶の所有数

	西欧人		地元民	
	船舶数	トン数	船舶数	トン数
1887年	49	2,048	50	526
1888年	74	1,433	148	1,073
1889年	117	1,756	198	1,264
1890年	137	2,221	246	1,687

(出所) *B. P. P., Colonies General*, Vol. 30, C. 6829:  
Annual Report for 1890, p. 244, に基づいて作成。

たのは、多くの島嶼間を交易するうえでカヌーの方が大型船舶に比べて便利であったからである。大型船舶の場合、少量の荷物を分配するために多くの島嶼間を移動するとコストがかかり、また珊瑚礁に座礁する危険性もあるが、カヌーだと小回りがきくので以上の問題を克服することができる。ラウ諸島にカヌーが今なお存在しているのは近代化に遅れているからではなく、島嶼間交易をするうえでカヌーが優れているからであり、ラウ諸島においては近代的な大型船舶とカヌーが「棲み分け」をしているといえる。

島嶼間交易は天災のときにも大きな役割を果たした。フィジーには1875年から1975年までの間に年1回の割合で台風が来島しているが、そのほとんどはラウ諸島を通過するという (Bayliss-Smith et al. [1988], p. 83)。1940年代までフィジーの植民地政府からラウ諸島に対する食糧品の援助がなかったため、島嶼間で不足の食糧を相補いあった (同上, p. 142)。天災時は特に石灰岩島が大きな被害を受けるが、そのときでも石灰岩島の人々が主体的に形成していた交易のネットワークが島嶼民の生存を守る働きをしていたのである。

島嶼間の生態的な違いに基づく交易、天災時の救援活動、朝貢にともなう儀礼的物産交換などの他に交易は次の要因によっても促進された。

- (1) 1837年以降に激しくなったトンガ内戦争や、1855年まで続いたフィジー内での戦争により戦闘用ダブルアウトリガーなどのカヌーの需要が増大し、それにともない他の物産の生産も増えて交易が盛んになった

(Young [1982], p. 38)。つまりカヌー・木製工芸品⇔食糧という交易関係の一方の需要が拡大したため、それと交換するために他方の物産の需要も高まり、双方の生産量が増えるとともに交易が活発になったのである。

- (2) 1920年から35年にかけてコプラの値段がトン当たり25ポンドから8ポンドに下落した際に、一時、衰退していた生活用植物が栽培され、工芸品が生産され始めたので交易が再び頻繁に行われるようになった(Thompson [1940b], pp. 92-93)。ラウ諸島において植民地化が進むにしたがい、世界商品であるコプラの生産も始まり、ラウ諸島の経済活動がそのまま世界市場に直結してしまうことで、ラウ諸島間で完結していた物産の流れに変化がもたらされ、島嶼間交易も衰微した。しかし世界市場は常に安定的ではなく、その不安定さの被害を最も受けるのは世界市場に全面的に依存している地域である。ラウ諸島の場合、世界市場に変化が生じた場合に在来の生産システム、交易システムに転換できたことで、その影響を大きく被らずにすんだが、それを可能にしたのもラウ諸島社会に埋め込まれた生命維持装置としての島嶼間交易であるといえよう。

以上のようにラウ諸島内で様々な要因により交易が行われていたが、現代においては国境が引かれているトンガとの間でも物産の移動や文化の交流がみられた。国境がない当時にあつてはカヌーの航海を遮るものはなにもなく、トンガの影響を受けた勢力圏がラケンバ島を中心に形成され、海洋島嶼国家の様相を呈するようになった。

ラウ人は一般のフィジー人とは異なり背が高く、皮膚の色が薄いという特徴をもっている。そして儀礼をする過程で首長制や位階が明確に現れること、女性の地位が高いことなどもラウ諸島の特徴であり、それはトンガからの影響の結果であるといわれている(Thompson [1938], p. 192)。さらにトンガ式のカバ儀礼や、トンガ式ダンスも行われ、家の中で信仰の対象となっていた神々もトンガに由来するものであった(Thompson [1940a], pp. 71-85)。ラウ



諸島はポリネシア文化とメラネシア文化双方の性格を併せ持っているが、それは琉球が日本と中国の文化を吸収し、独自の文化圏を形成したのと類似している。

トンガ人がラウ諸島に引き寄せられたのは、石灰岩島に硬木があり、それを材料としてダブルアウトリガーを船づくりに長けたラウ人に作ってもらうためであった。ときにはトンガから船大工がラウ諸島に来島したが、彼らはラウ諸島の木工と競合するようになった。そしてトゥイ・ナヤウという首長の付随大工としてマタイ・レマキと呼ばれるようになった (Thompson [1938], p. 193)。ラウ諸島間交易が生み出した島嶼ごとの物産の生産と、その技術的向上が、トンガ人をラウ諸島に引きつけて、またトンガ人の定着をも促しながらトンガ文化がラウ諸島に吸収されていったのである。

そしてトンガ人が戦闘の術に優れていることから、ラウ諸島の各首長に雇われるようになり、その見返りにラウ諸島の土地を手に入れ、自らの勢力を拡大していった (同上, p. 29)<sup>(6)</sup>。トンガ人首長はラウ諸島民から税金として多くの香油を取り立てた。それに応えるためにラウ諸島民はココナツヤシを大々的に栽培し始めたが、これが基になって後にコブラ貿易が行われるようになる (同上, p. 194)<sup>(7)</sup>。トンガ人首長が政治的権力を握ったことが、後に述べるトンガ人・マアフが異人王としてラウ諸島に君臨するのを可能にした。

以上、ラウ諸島における交易活動についてみてきたが、物産の移動では食糧を供給できる火山岩島が他の石灰岩島を従える形で島嶼間には位階制が発達してきた。その位階制にともなう儀礼、そして琉球においてニライカナイ信仰と類似したプロツ信仰などを通じた、ラウ諸島における国家像の形成について次に論じてみたい。

## 2. ラウ諸島における国家像の形成

ラウ諸島の中心に位置していたのがラケンバ島である。ラケンバ島は海のクロスロードであり、ラウ諸島の南部にある島々や北部にあるタベウニ島、

そして西部にあるモアラ島から島伝いに航行するときに潮流や風向きの関係で気候的、地理的にラウ諸島の中心にあった (Reid [1977], p. 3)。ラケンバ島は周囲の島々に食糧を供給できるという意味でも、島嶼間関係の軸であったのであり、交易や儀礼そして災害時救済で重要な役割を果たした。

島嶼間におけるランクはラウ諸島全体で挙行される祭のときの席順に明らかとなる。それはラケンバ島、ナヤウ島、カンバラ島、モゼ島、オネアタ島、フランガ島、ディディア島、オノ島の順であった。各島にはマタキラケンバと呼ばれた人々がいたが、彼らは各島とラケンバ島の首長との間の仲介者になって献上物を運んだり、ラケンバ島の首長を各島に招いたりした (Thompson [1940a], pp. 39-52)。ラケンバ島がラウ諸島の中で中心的な位置につく以前には、カンバラ島がナムカ島、ワンガバ島、コモ島と朝貢関係を結び勢力が大きかった。しかしラケンバ島がラウ諸島の中で最も食糧がとれること、そしてトンガから政治的、文化的な支援を得たことによって島々を統合するようになった (Thompson [1940b], p. 22)。

ラケンバ島の首長に対する献上物として各島は次のような物産をもたらした。ナヤウ島はヤム・蒸しバナナ、オネアタ島やモゼ島は発酵した食べ物・バナナ、カンバラ島やフランガ島はココナツ・海産物・工芸品などを贈った。また儀礼として各島嶼民がラケンバ島で歩くときは腕を組まなければならないが、資源がほとんどなく位階も低いフランガ島の人々はラケンバ島だけでなく、カンバラ島、モゼ島でも腕を組んで歩かなければならなかった (Hocart [1971], p. 26)。ラウ諸島における支配従属関係は三つに分けることができる。第1はムガチと呼ばれるもので、首長が戦争しているときには参加しなければならない。第2はムガリであるが、征服された島嶼民との関係であり、食糧や工芸品などを首長に献上する義務がある。第3はカイシで、首長に隷属する関係である (Thompson [1938], p. 189)。このようなラケンバ島に対する物産の献上、儀礼的行為、支配従属関係を通じてラウ諸島は政治的な秩序を形成し、マタニトゥつまり国家としての内実をととのえていった。

以上のような朝貢関係は様々な儀礼のときに明確になるが、そのとき、物

産の交換も行われる。ラウ諸島の最高首長であるトゥイ・フィナウが死亡した際には、各島にカヌーで死亡の通知が回り、貴重財である鯨の歯、そしてマット、タバ、食糧が集められた。遠隔に位置する島々つまりフランガ島、オンゲア島、ブアトア島、オノ島を除いてほとんどの島々の代表が葬儀に参列するためにラケンバ島に来航した(Thompson [1940a], p. 96)<sup>(8)</sup>。このような機会を通じてマタニトゥとしてのラウ諸島の政治的結束力は強化され、物産の移動も活発に行われたのである。

儀礼時における島々の統一した行動と物産の移動は現代においてもみられた。例えば1980年にラウ諸島の最高首長であったラトゥ・マラが、その妻アディ・ララの一族に自らの子供を差し出すという儀礼が挙行された。これはラウ諸島とは別の政治的勢力圏であるレワを代表する妻の一族に対してラウ諸島全体が贈り物を届け、それに対して妻の一族は宴を開き、返礼品を持たせるという競争的交換の性格をもった儀礼である。各島はラトゥ・マラから強制的に献上品を差し出されたり、宴に参加させられたのではなく、各島嶼民がラトゥ・マラの人格を判断し、自らの意志に基づいて1000人以上のラウ諸島民がこの儀礼に参加した(Hooper [1982], p. 202)。そのときに各島が献上した物産を表2で明らかにした。

この表から明らかなように鯨の歯という貴重財は別にして、火山岩島と石灰岩島という生態的な違いが、それぞれの島に相異なる特産物を生み出したことがわかる。ローラ・トンプソンによればフランガ島の特産物はカヌー、頭支え、マット、木材、器、掘り棒など、オンゲア島の特産物はカヌー、マット、器など、そしてカンバラ島の特産物はカヌー、カバ用器、マット、タバ、木材、掘り棒などであったが、ラケンバ島からは食糧を受け取っていた(Thompson [1940a], p. 211)。1980年においてもモアラ島、ラケンバ島などの火山岩島が多くの食糧を提供し、他の石灰岩島が工芸品などを運んでいた。このように島によって物産上の違いがあるので今日においてもラウ諸島内でカヌーによる交易が盛んに行われているのである。

現代においてもラウ諸島内に強い結束力がみられるのはラケンバ島の最高

表2 ラウ諸島の献上品

	献上品および数量
カンバラ島	鯨の歯：10, カバ容器：172
ナムカ島	太鼓：3, タバ：1
コモ島	マット：20
モアラ島	鯨の歯：15, マット：20, ヤム：4,000, タロ：500, 亀：11
フランガ島	鯨の歯：9, カヌー：3, 器：20, 盆：10, 掘り棒：10
オンゲア島	頭支え：6, 櫛：22
オノ島	鯨の歯：16, ココナツの繊維：1, タバ：1, マット：10, ココナツオイル：100瓶
マツク島	鯨の歯：15, マット：38, ヤム：1,000, ココナツ：2,000
モゼ島	鯨の歯：4, タバ：2, シーツ：60
オネアタ島	鯨の歯：4
ディディア島	鯨の歯, ココナツの繊維, マット (個数不明)
ナヤウ島	鯨の歯, マット (個数不明)
ラケンバ島	鯨の歯：10, タバ：2, マット：9, ココナツオイル：300瓶, ヤム：2,000, タロ：200
トトヤ島	鯨の歯：10, マット：36

(出所) Hooper [1982], p. 215, に基づいて作成。

首長に対する恐れと尊敬の念が残っているからである。他方、最高首長には各島嶼への義務という観念があり、例えば1969年にラトゥ・マラがラケンバ島の最高首長に就任する際に、ラケンバ島にいる4人の首長がラトゥ・マラに対して、彼自身のラウ島嶼民に対する義務の内容を明確に伝える儀礼があった。その義務の中で重要なのは島嶼民を災害から守り、食糧を十分に供給することであった (Hooper [1982], p. 155)。また最高首長は次のこともできると信じられていた。降雨や豊作をもたらし、台風を回避させ、人々の健康を維持し、親戚関係・慣習・首長制度・キリスト教会・フィジー政府の繁栄と永続を可能にすることである (同上, p. 168)。琉球と中国や日本との間、また琉球王府と先島との間にあったコスモロジー的な関係がラウ諸島の中にもあったのであり、島々を結びつける機能を果たした。このコスモロジーに実体を与えたのは琉球に比べて中国や日本が物的に豊かであったこと (先島

に比べて王府は相対的に豊かである)であり、ラケンバ島が食糧生産条件で恵まれていたことであった。

さて再びラウ諸島におけるマタニトゥ形成について論じるが、先に記したように政治経済的にラウ諸島に大きな影響を与えたのはトンガであった。ラウ諸島にある硬木を求めてトンガ人は来島し、硬木の他にタバ、ココナツオイル、鯨の骨でつくった工芸品を持ち帰り、カヌーをラウ諸島にもたらした。そしてトンガ人戦士が戦鬪を援助した見返りとしてラウ島嶼民をトンガに連れていった場合もあった (Routledge [1991], p. 18)。さらに1835年にはトンガからの伝道師によりフィジーではじめてラケンバ島に教会が設置され、1849年にはラケンバ島の最高首長がキリスト教徒になった (Thompson [1938], p. 194)。

1865年にはラケンバ島の最高首長とトンガ王との間に友好条約が締結されるまでになったが、その内容は永続的平和関係、相互防衛義務、各領土間の自由な移動ならびに定住を取り決めるものであった (Reid [1983], p. 183)。さらに1868年までトンガの旗がラケンバ島に翻っていた (同上, p. 189)。ラケンバ島がトンガの条約締結の相手となったのはラウ諸島がマタニトゥとして国家的実質をもっていたからであったといえよう。

上の条約を結んだのはトンガの代表としてラケンバ島に赴いたマアフであったが、彼はそのままトンガに帰らず、トンガ戦士を取りまとめ、教会の指示を取り付け、またフィジーではじめてカヌーに大砲を設置して戦鬪に勝利をおさめ、自らの力を増大していった (Thompson [1940a], p. 30)。このマアフが異人王としてラウ諸島の政治経済的統一をさらに強化し、海洋島嶼国家の内実をつくっていった。

マアフの様々な統治策の中で最も有効であったといわれているのは経済政策であった。それは沿岸地への居住地の拡大、トンガ式土地保有制度の導入、商品作物としてココナツの栽培などである。新しい経済政策を実行したマアフの目的は、島嶼民に納税の義務を負わせ、それを財政的基盤としてフィジーにおける自らの軍事的力を拡大しようとしたことである。そしてトンガ

の慣習であるマギマギをも採用した。それは土地を測るために組み紐でつくられた大きな籠であるが、ある島ではすべての成人にマギマギが支給され、ココナツの栽培が拡大する要因となった (Michael [1978], pp. 96-97)。島嶼に新しい生産方法を導入して島嶼の生産性を向上させることで、マアフそしてラウ諸島の政治的勢力をフィジー全体の中で拡大した。島嶼の生態的違いが経済活動を促進するとともに、新しい生産方法が異人王によって導入されることで、物産の生産と移動が盛んになり、マタニトゥとしてのラウ諸島の経済的基盤が強化された。

さらにマアフは島嶼の限られた土地を有効に使うため、島嶼民が土地を利用し税を納めるかぎりは土地を取り上げなかったが、未利用の土地は強制収用した。またラウ人やトンガ人の土地を小分割して所有させるようにし、西欧人に対しては土地を長期的に貸し出す方式を用いた (Reid [1983], p. 186)。以上のような土地政策により土地は有効に利用され、ココナツ、綿花が栽培され、それにともないマアフの経済力も増大した (Scarr [1970], p. 115)<sup>(9)</sup>。そしてラウ諸島間の物産の移動も活発になり、マアフを中心とするラウ諸島の政治力もました。1869年にはトゥイ・ラウつまりラウ諸島の最高首長にマアフは就任した。マアフはトンガから革新的な諸事物や制度をもたらしたが、ラウ諸島をトンガの植民地にするのではなく、トゥイ・ラウになることでラウ諸島のマタニトゥとしての枠組みの中に自らを位置づけ、独自の海洋島嶼国家を作り上げようとしたのである。

ラウ諸島以外にもフィジーにはいくつかの小国家があり、19世紀半ばにおいて小国家間の紛争が絶えなかった。1865年にキャプテン・ジョンのすすめで小国家間の連合が実現した。しかし1869年にはマアフと敵対していたザコムバウが大統領に就任することにマアフが反対した結果、小国家連合は瓦解した。そしてマアフはラウ諸島を含むいくつかの小国家を糾合し、北東同盟を結成した。一方、ザコムバウがムバウというマタニトゥをつくったことにより、1871年にザコムバウがフィジー王になるまでフィジーは二分国家の状態になった (Kerr [1969], pp. 24-25)。1874年にイギリスの植民地にフィジーが

おかれる前の19世紀半ばにおいて海洋島嶼国家は海上戦を通じて離散集合を行いながら、二つの勢力圏を形成していた。

北東同盟の立法機関は各島の首長で構成され、トゥイ・ラウやトゥイ・ナヤウがその機関の最高位についた。北東同盟の各地域にはそれぞれ行政機関が設置されていた。未利用地が政府所有とされ、条件付きで西欧人に貸し出されたので、マアフは彼らの支持をも取り付けることができた。1869年にマアフがトゥイ・ラウになるとともに、北東同盟はフィジー同盟とその名を変えた。フィジー同盟では憲法が作成されたが、それはラウ諸島の憲法をモデルとして作られたという (Routledge [1991], p. 115)。西欧人の支援を得ながら立法や行政の西欧的諸制度を北東同盟 (フィジー同盟) に採用することで近代国家への準備をしていたことがわかる。マアフについて次のマーシャル・サーリンズの言葉は示唆的であるといえる。

「彼 [支配首長] はみずから同時に陸でも海でもあり、または交互に陸と海になり、財の交換の最高の媒介者、文化全体の創造者として機能するからである。起源的に外来者である彼は、土地の民にとっては海の人であり、土着の陸の産物との交換において、海産物や外来の品々を調達する者となる。他方、外来の殺し屋たち〈本当の海の民〉に対しては、首長は〈土地〉(ヴァヌア)を代表し、海の同盟者たちに土着の所有者の農産物と工芸品をもたらす。」(サーリンズ [1993], pp. 132-133)

上の文章はトゥイ・ナヤウについて述べたものだが、支配首長の両義性はマアフについてもあてはまる。マアフがラウ諸島や北東同盟の中心者として振舞うことで財の交換が促され、全体に政治的・文化的纏まりがみられるようになった。土着民に対してはトンガ人として海の向こうから革新的なものをもたらし、外来の進入者に対しては土地側にたって勢力の形成をはかるといふ両義性を異人王としてのマアフは備えていたといえる。

ザコムバウがフィジー王になってからアメリカへの借金を払ってもらわないうわりに、イギリスにその植民地支配下にはいることを提案したときに、ラウ諸島の人々からそれに対して抗議の声がおこった。その理由はラウ諸島の土

地はザコムバウのものではなく、マアフのものであるというものであったが、マアフ自身の説得によって植民地化を受け入れることになった (Scarr [1970], p. 112)。ザコムバウがフィジーを統一した後もマアフに対する信頼と、マタニトゥとしてのラウ諸島という枠組みが残っていたことがわかる。

1874年にイギリスの植民地下におかれた後、フィジー全体が18の行政地区または州に分割され、それぞれの地区はロコという地元の首長とともに、西欧人の地区行政官の管轄をうけるようになった。しかし例外的にラウ諸島ではラケンバ島の最高首長であるロコが地区行政官をも兼務することが認められた (Thompson [1940b], pp. 62-64)。マタニトゥとしてラウ諸島が独自性をもっていただけから最高首長の大きな権限が植民地化後においても容認されていたのである。

またフィジーの人々が英雄的存在と見なしていたラトゥ・スクナにとって、ラウ諸島の最高首長であったラトゥ・フィナウは叔父にあたる人であり、先に紹介した1980年の儀礼を行ったラトゥ・カミセセ・マラはトゥイ・ナヤウであると同時に、フィジーの大統領でもある。現在、フィジーの知的職業についている人々の中にはラウ諸島出身者が多く、特に政界においては大きな勢力を持っているといわれている (Young [1993], p. 170)。1970年にイギリスから独立した後もラウ諸島はフィジーの中で政治的な意味で大きな位置を占めていることがわかる。

次にラウ諸島と琉球王国との関係を海洋島嶼国家という観点から考察してみたい。19世紀初期においてトンガの影響を受けてラケンバ島を中心としたマタニトゥが形成されたが、ラウ諸島はフィジーの中の他のマタニトゥ (Thompson [1947], p. 215/春日 [1994], p. 210) とも独自の関係を結んでいた。ラケンバ島はかつてムバウというマタニトゥに贈り物を届けたり、ラケンバ島の首長位が継承される時その認可を貰ったり、そしてムバウの貴族層にラケンバ島から花嫁を送ったりした (Hocart [1971], pp. 28-29)。それは海洋島嶼国家琉球が王国内で華夷秩序をつくると同時に、中国や日本の華夷秩序に属したのと同じように、ラウ諸島も独自の国家秩序を維持しながら、トン



がやムバウと独自の関係を結び、双方から影響を受け、自らの海洋国家を発展させた。このように海洋島嶼国家はいくつもの政治的領域の重ね合わせの部分に形成されたのであり、それは陸地とは異なり、明確に国境を定めにくいという海洋の特性の結果であろう。

また海洋性について琉球との類似性を指摘すれば、生命の危険を伴う交易活動を行う主体の背景として海上他界の富への強い憧れを先に指摘したが、ラウ諸島においても琉球のニライカナイ信仰に似たプロツ信仰があった。例えばオノ島では死者の行き場所としてプロツが信じられていた。カンバラ島ではプロツはオノ島とマツク島の間の海底または水平線の彼方にあり、その島のすべては赤く、美しい女性が住んでいると考えられていた (Thompson [1940a], p. 116)。カンバラ島の古いダンス舞曲の一節には次のような歌詞があった。

「私たちがカヌーでプロツに着いたとき、島の人は驚いていた。赤や黄金の白壇の香り、甘い果物の香りに島は満たされていた。」 (Thompson [1940b], p. 82)

マツク島民によればプロツには美しい女性が住み、永遠に実る果実の木に小鳥が囀っていたが、そこにかつてフィジー王ザコムバウの従兄弟であるラトゥ・マラが辿り着こうとしたといわれている。他の島の人はマツク島にはプロツ人と呼ばれる人々が居住しており、彼らの祖先はプロツから来たと信じていた (St. Johnston [1918], p. 30)。あるプロツでは住民が食糧を栽培し、家族とともに生活をするというように、現世と同じ状態であるとされていた (Williams [1982], p. 247)<sup>(10)</sup>。このようにニライカナイと同じく、ラウ諸島においてもプロツは現世のように祖先が住んでいる所で、一種の理想郷と信じられていたのである。

ラウ諸島には次のような伝説がある。ラウ諸島の首長の家で祖先とされていたクブナバヌアの息子の一人がプロツで生まれて「プロツの王子」と名付けられ、その後、「赤と黄金の土地の首長」と呼ばれるようになった。そしてナヤウ島にゆき、ラウ諸島の首長家の祖先となったといわれている (Geraghty

[1993], p. 350)。この伝説においてはラウ諸島の首長制とプロツ信仰とが関連した形でとらえられているが、琉球国王とニライカナイ信仰とは聞得大君を通じて結びついていた。海上他界と首長・国王とを結びつけることが可能であったのは両島嶼において異人王の取り込みによる国家形成という共通の政治統一形態があったからであろう。またそこには未知の豊かな富を海上彼方に求めることにより国家の経済的基盤を固めるという海洋交易国家の特性も反映されているのではなかろうか。

火山岩島の人が工芸品、石灰岩島の人が食糧、トンガ人がラウ諸島の硬木を求めて海上の水平線の彼方に期待を込めながら航海した経験の数々がプロツ信仰という人間の観念の結晶を生み出したのであろう。このように相対的に豊かな島に対する島嶼民の憧れを動因としてラケンバ島を中心とする島嶼の連合という政治形態が可能になったと考えられる。琉球と同じく、一つの島が単独では生きていけない島嶼世界では海を媒介として交易により島嶼を結びつけたことで人々は生活の安定を得た。その生命維持装置を確実なものにするために豊かな島に対する島嶼民の信仰をもとにした島嶼間の外交儀礼が作り上げられる過程でラウ諸島は海洋島嶼国家として存在するようになった。

### 結びにかえて

琉球王国とマタニトゥ・ラウ諸島における海洋島嶼国家形成の相違と相似とを明らかにして、琉球王国がアジア世界とオセアニア世界を連絡する結び目としての性格をもっていることを明らかにしたい。

まず次のような相違点が両者の間にはある。第1に、琉球王国形成にとり不可欠な存在として聞得大君を頂点とする神女組織があったが、ラウ諸島にはそれに類するものがないということである。聞得大君が国王の権能を靈的に強化した後、ノロと呼ばれる神女が国王から渡された曲玉、簪、辞令書な

どを王の靈的力が備わったものとして琉球の各地で祭礼を司った。また1500年の石垣島征服や1609年の島津侵略の際に神女の祈禱が王府の中で大きな位置を占めていた。このような神女はラウ諸島にはいないが、トンガにおいては王の姉妹やその娘が強い宗教的威力をもったという事実があり、琉球との近さを認めることができる。

第2の相違点は、琉球が属した中国型華夷秩序や日本型華夷秩序、そして琉球型華夷秩序を作り上げたイデオロギーは儒教であり、アジア文化圏の論理に従って琉球は王国として外交的に位置づけられ、アジア交易圏の中でアジア特有の物産をアジアの中継地点・琉球に集めるというラウ諸島とは全く異なる文化・交易圏の中に琉球が存在したことである。よって当然のことながら琉球とラウ諸島は共通の歴史的事実を共有しておらず、物産の直接的取引もなかった。

以上のような相違点があるにもかかわらず、「はじめに」で述べたように両国家には次のような相似点がある。(1)大島嶼国家に対する小島嶼国家の独自性、(2)大国から政治経済的、地理的、文化的に等距離を保つことで、大国から様々な事物を吸収することができたこと、(3)異人王の伝統、(4)海上他界観、言葉、漁法における類似性などである。

本章では国家形成の過程で特に交易に焦点をあてたが、その交易活動においても両地域には次のような共通点があった。それは島嶼の環境的違いと特産物の違いに応じて、島の不足を補うために交易が行われていたのであり、ラウ諸島では火山岩島と石灰岩島との間で交易が展開された。琉球においては、資源の少ない琉球と物産の豊かな日本そして東南アジア島嶼部の間、そして沖縄島と先島の間、先島の中でも田国島と野国島との間で物産の移動がみられた。

よって両地域が属したそれぞれの文化圏にそって、その国家形成の思想・儀礼・制度などに相違はあるが、海洋島嶼国家性という観点から両地域をみなおすと多くの共通点が浮かび上がってくることもまた事実である。つまり海を媒介とすることで大島嶼国家または大陸からの圧倒的な影響力を緩和し、

政治経済的、文化的に独自の勢力圏を形成したのが琉球とラウ諸島であった。

また海という属性から次のような世界観や経済活動が生まれた。ニライカナイ信仰とプロツ信仰という海の彼方の富に対する憧れと、その富を島に引き寄せる手段として交易活動が両地域に存在した。その背景には生活空間が狭く、海に閉ざされているという島嶼の厳しい現実があった。交易の主体としての島嶼民も生命の危険が伴う航海を敢えて行うために、恐怖をも乗り越える海の彼方の富に対する強烈な夢と期待をもってたと想像できよう。

このような世界観や経済活動はまた国家形成のうえでも大きな意味をもっていたのではなかろうか。すなわち、ラウ諸島において食糧を十分供給できる火山岩島が石灰岩島を従える形で位階制が発達したように、琉球においても「貧しい島」が「豊かな島」に富を求めるといふ求心力が王国を形成し、維持する要になったと考える。当然のことながら、ラケンバ島がマタニトゥとしてのカンバラ島を征服し、沖縄島が奄美大島や先島を征服したように、自らの島は「豊か」で他の島は「貧しい」という価値観の押しつけと武力の行使による自国の拡大といった側面はある。

独自の勢力圏の形成はその地域の内部論理だけによるものではなく、外部の大国の富への期待を現実化するために、それぞれの文化圏に応じた外交儀礼を行い、交易により政治経済的、文化的富を自己のものにするという対外関係抜きにしては語れない。このような対内的、対外的な海上他界思想を国家形成の土台としたので、両国家において外部の強力な異人を取り込んで国家秩序の強化をはかることも可能になったのであろう。

海上他界思想は現代においても生きている。琉球・沖縄において、近年、日本本土への経済的依存状況を脱するために、琉球王国の大交易時代が評価され、島嶼の経済自立策の一環として中国、東南アジア諸国との貿易、交流が試みられている。このような琉球・沖縄の海洋島嶼国家としての振舞いは自らの歴史性が先行しすぎて、現実のアジア経済のダイナミズムの内実を踏まえないものなのであろうか。それともアジア経済の躍動がアジアの歴史的結果であるなら、その歴史の中で重要な位置を占めていた琉球・沖縄も現実

の経済的歪みを克服して、アジアの大きな経済的うねりに乗れるのではないかという期待がある。ニライカナイの富への熱望は現代においては琉球・沖縄の自立経済を達成するという島嶼民の意志の中にうかがうことができよう。

以上、琉球列島とラウ諸島において海洋島嶼国家が形成される際に交易活動やそれにとまなう様々な儀礼やコスモロジーが重要な位置を占めることが明らかになった。ここでいう国家はいわゆる近代西欧国家とは異なり、国境が明確ではなく、多くの勢力圏の影響を受けながら、自らの拠点を築くという開かれた性格をもつものであった。島嶼民は孤立しては存続していけず、他の地域との交易で物産の遣り取りをしなければならなかったのである。島嶼民は自前で交易網と国家を作り上げたのであり、今日、辺境に位置づけられ、政治経済的に中央に依存している島々の中にこそ自立を可能にする要因があることがわかる。

〔注〕

- (1) 以下の原文の意識。「我國。土瘠産少。國用不<sub>レ</sub>足。故與<sub>二</sub>朝鮮・日本・暹羅・爪哇等國<sub>一</sub>。嘗行<sub>二</sub>通交之禮<sub>一</sub>。互相往來。以備<sub>二</sub>國用<sub>一</sub>。萬曆年間。王受<sub>二</sub>兵警<sub>一</sub>。出在<sub>二</sub>薩州<sub>一</sub>。時王言。吾事<sub>二</sub>中朝<sub>一</sub>。義當<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>終。日本深嘉<sub>二</sub>其志<sub>一</sub>。卒被<sub>二</sub>縱回<sub>一</sub>。自爾而後。朝鮮・日本・暹羅・爪哇等國。互不<sub>レ</sub>相通<sub>一</sub>。本國孤立。國用復缺。幸有<sub>二</sub>日本屬島<sub>一</sub>。度哇喇商民。至<sub>レ</sub>國貿。往來不<sub>レ</sub>絶。本國亦得<sub>二</sub>賴<sub>一</sub>度口圭喇<sub>一</sub>。以備<sub>二</sub>國用<sub>一</sub>。而國復安然。」
- (2) 沖縄島と周辺諸島との間でも木材の交易が18世紀初頭にあった。崎浜 [1984], p. 87を参照されたい。
- (3) 以下の原文の意識。「南夷宮古・八重山等島。皆來<sub>レ</sub>臣。」
- (4) 以下の原文の意識。「王曰。隔<sub>レ</sub>海殊<sub>レ</sub>地。素非<sub>二</sub>吾政令所<sub>レ</sub>及。何為來貢耶。對曰。近我海島。無<sub>二</sub>烈風猛雨之患<sub>一</sub>。五穀饒熟。是必王國之善政。感<sub>二</sub>于天地<sub>一</sub>。故也。是以來貢。」
- (5) 以下の原文の意識。「見<sub>二</sub>琉球<sub>一</sub>事大之禮<sub>一</sub>。各率<sub>二</sub>管屬之島<sub>一</sub>。稱<sub>レ</sub>臣納<sub>レ</sub>貢。由<sub>レ</sub>是中山始強。」
- (6) トンガとフィジーとの交易はラピタ式土器の発見により数世紀前まで遡れる。トンガにおいて石灰岩島が手斧、黒曜石などを火山岩島から得ていた。Davidson [1977], pp. 86-88, を参照されたい。
- (7) トンガとの関係は1930年代においてもみられた。ナムカ島の最高クランに属するアニテルという人物がトンガで壮年期を過ごし、トンガの慣習（女性のタ

- パ製造のためのギルド)を学び、ナムカ島に導入した。Thompson [1940b], p. 64, を参照されたい。
- (8) 1825年にラケンバ島に漂着したケアリーという人物によれば、ラケンバ島は国家として非常に纏まりをみせ、ある祭りのときには数千人の人が集まったが、その中にトンガやサモアからの来訪者がいたという。Reid [1977], pp. 20-22, を参照されたい。
- (9) マアフが導入した税制は英国植民地政府によって人頭税として受け継がれた。Michael [1978], p. 98.
- (10) トンガ、サモア、ウベア、フツナにもプロツ(またはプロツ)信仰があった。Geraghty [1993], p. 344, を参照されたい。

## 〔参考文献〕

### 〈日本語文献〉

- 安里進 [1991], 「グスク時代開始期の再検討」(琉球新報社編『新琉球史 古琉球編』琉球新報社)。
- 安渡遊地 [1988], 「高い島と低い島の交流—大正期八重山の稲束と灰の物々交換—」(『民族学研究』第53巻第1号)。
- [1992], 「西表島の稲作と畑作—南島農耕文化の源流を求めて—」(谷川健一編『琉球弧の世界 <海と列島文化 第6巻>』小学館)。
- 伊波普猷 [1974], 「孤島昔の琉球史」(『伊波普猷全集 第2巻』平凡社)。
- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山正編 [1941a], 『中山世譜』(『琉球史料叢書 第4巻』名取書店)。
- [1941b], 『琉球国由来記』(同上書, 第1巻)。
- 李熙永編訳 [1972], 「朝鮮李朝実録所載の琉球諸島関係資料」(谷川健一編『わが沖繩 第5巻』木耳社)。
- 浮田典良 [1974], 「八重山諸島における遠距離通耕」(『地理学評論』第47巻第8号)。
- 折口信夫 [1955], 「妣が國へ・常世へ」(『折口信夫全集 第2巻』中央公論社)。
- 春日直樹 [1994], 「『土地の民』からみた国家の形成と変容—フィジーのマタニトゥ概念を中心として—」(熊谷圭知・塩田光喜編『マタニギ・パシフィック—太平洋島嶼国の政治・社会変動—』アジア経済研究所)。
- 喜舎場永珣 [1979], 『八重山民俗誌 民俗編(上巻)』沖繩タイムス社。
- 球陽研究会編 [1974], 『球陽 読み下し編』角川書店。
- 崎浜秀明編 [1984], 『蔡温全集』本邦書籍。
- サーリンズ, M. (山本真鳥訳) [1993], 『歴史の島々』法政大学出版局。

- 真栄平房昭 [1984], 「琉球における家臣団編成と貿易構造—『旅役』知行制の分析—」(藤野保編『九州と藩制(II)』国書刊行会)。
- 高谷好一 [1984], 「『南島』の農業基盤」(渡部忠世・生田滋編『南島の稲作文化—与那国島を中心に—』法政大学出版社)。
- 東京国立博物館 [1992], 『海上の道—沖繩の歴史と文化—』読売新聞社。
- 中本正智 [1983], 『琉球語彙史の研究』三一書房。
- 牧野清 [1968], 『八重山の明和大津波』牧野清。
- 宮城栄昌・高宮廣衛編 [1983], 『沖繩歴史地図：歴史編』柏書院。
- 柳田国男 [1989], 『海上の道』(『柳田国男全集 第1巻』筑摩書房)。
- 藪内芳彦編 [1978], 『漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究』風間書房。

〈外国語文献〉

- Arno, A.R. [1976], "Joking, Avoidance, and Authority: Verbal Performance as an Object of Exchange in Fiji," *Journal of the Polynesian Society*, Vol. 85, No. 1.
- Bayliss-Smith et al. [1988], *Islands Islanders and the World: The Colonial and Post-Colonial Experience of Eastern Fiji*, Cambridge: Cambridge University Press.
- British Parliamentary Papers (B.P.P.), Colonies General*, Vol. 30, C. 6829: Annual Report for 1890, Shannon: Irish University Press.
- British Parliamentary Papers (B.P.P.), Colonies General*, Vol. 36, C. 9046-12: Annual Report for 1897, Shannon: Irish University Press.
- Davidson, J.M. [1977], "Western Polynesia and Fiji: Prehistoric Contact, Diffusion and Differentiation in Adjacent Archipelagos," *World Archaeology*, Vol. 9, No. 1.
- Geraghty, P. [1993], "Pulotu, Polynesian Homeland," *Journal of the Polynesian Society*, Vol. 102, No. 4.
- Gillett, R. et al. [1993], *Traditional Sailing Canoes in Lau*, Suva: University of the South Pacific.
- Hocart, A.M. [1971], *Lau Island, Fiji*, New York: Kraus Reprint Co.
- Hooper, S.J.P. [1982], "A Study of Valuables in the Chieftdom of Lau Fiji," unpublished, ph. D. Thesis, Cambridge: University of Cambridge.
- Kerr, G.J.A. & T.A. Donnelly [1969], *Fiji in the Pacific: History and Geography of Fiji*, Brisbane: Jacaranda Press.
- Michael, A.H.B. Walter [1978], "The Conflict of the Traditional and the

- Traditionalized: An Analysis of Fijian Land Tenure," *Journal of the Polynesian Society*, Vol. 87, No. 2.
- Pacific Islands Monthly (PIM)*.
- Reid, A.C. [1977], "The Fruit of the Rewa: Oral Tradition and Growth of the Pre-Christian Lakeba State," *The Journal of Pacific History*, Vol. 12, Nos. 1, 2.
- [1983], "The Chieftdom of Lau: A New Fijian State Built upon Lakeban Foundation," *The Journal of Pacific History*, Vol. 18, No. 3.
- Routledge, D. [1991], *Matanitu: The Struggle for Power in Early Fiji*, Suva: University of the South Pacific Press.
- Sahlins, M.D. [1962], *Moala: Culture and Nature on a Island*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Scarr, D. [1970], "Cakoubau and Ma'afu: Contenders for Preeminence in Fiji," in J.W. Davidson & D. Scarr eds., *Pacific Islands Portraits*, Canberra: Australian National University Press.
- St. Johnston, J.R. [1918], *The Lau Islands and Fairy Tales and Folk-Lore*, London: Times Books Co. Ltd.
- Thompson, L. [1938], "The Culture History of the Lau Islands, Fiji," *American Anthropologist*, Vol. 40, No. 2.
- [1940a], *Southern Lau, Fiji: An Ethnography*, Honolulu: Bishop Museum.
- [1940b], *Fijian Frontier*, San Francisco: American Council Institute of Pacific Relations.
- [1947], "The Problem of 'Totemism' in Southern Lau: A Reply to A. Capell and R.H. Lester," *Oceania*, Vol. 17, No. 3.
- Williams, T. [1982], *Fiji and Fijians: The Islands and Inhabitants: (Vol. 1)*, Suva: Fiji Museum.
- Young, J. [1982], "The Response of Lau to Foreign Contact: An Interdisciplinary Reconstruction," *The Journal of Pacific History*, Vol. 17, No. 1.
- [1993], "Lau: A Windward Perspective," *The Journal of Pacific History*, Vol. 28, No. 2.